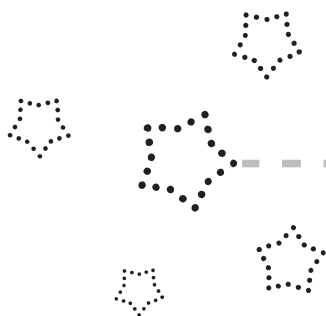


第1部 全体の調査結果

第6章

子育て意識と母親自身の生き方

諸田 裕子
木村 治生
邵 勤風
西村 祐美



第1節

子育てやしつけに関する意識

全体的には、自分の生き方より子育てのほうが大切だと考える母親が増加している。また、母親の年代・就業状況・学歴の違いによる子育てやしつけに関する意識の差がみられる。

● 自分の生き方より子育てが大切だと考える母親が増加

母親は子育てや子どものしつけについて、どのような意識をもっているのだろうか。この節では、母親の意識の経年変化や属性による違いを明らかにしたい。調査概要で示したように、03年調査、08年調査は幼稚園・保育園通しによる自記式質問紙調査であるが、97年調査は郵送法だったので、正確に比較することが難しい。したがって、97年調査の数値は参考値とする。

図1-6-1は子育てやしつけに関する母親の意識の経年変化を示している。「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」と考えている母親はこの11年間、大幅に減少している（97年調査74.7%、03年調査63.8%、08年調査56.7%）。「子どもを十分に愛している自信がある」は97年調査に比べて6.8ポイント増加している。「世間で名の通った大学に通ってほしい」（03年調査18.1%→08年調査21.2%）、「わがママを言ったら、わかるまで言葉でさとす」（03年調査62.4%→08年調査65.0%）、「子どもの進路は、親が責任をもって考えるべきである」（03年調査9.3%→08年調査11.8%）は、03年調査に比べて、2、3ポイント微増している。

それぞれの調査年の時代背景や母親自身の属性の変化などがこのような結果に影響を与えていると考えられるが、全体的には、この11年間、自分の生き方より子育てが大切だと、子育てを優先する母親の姿、子どものしつけや教育に対する関心が高くなった母親の様子がかがえる。

● 20代と30代、40代の母親では子育て意識が異なる

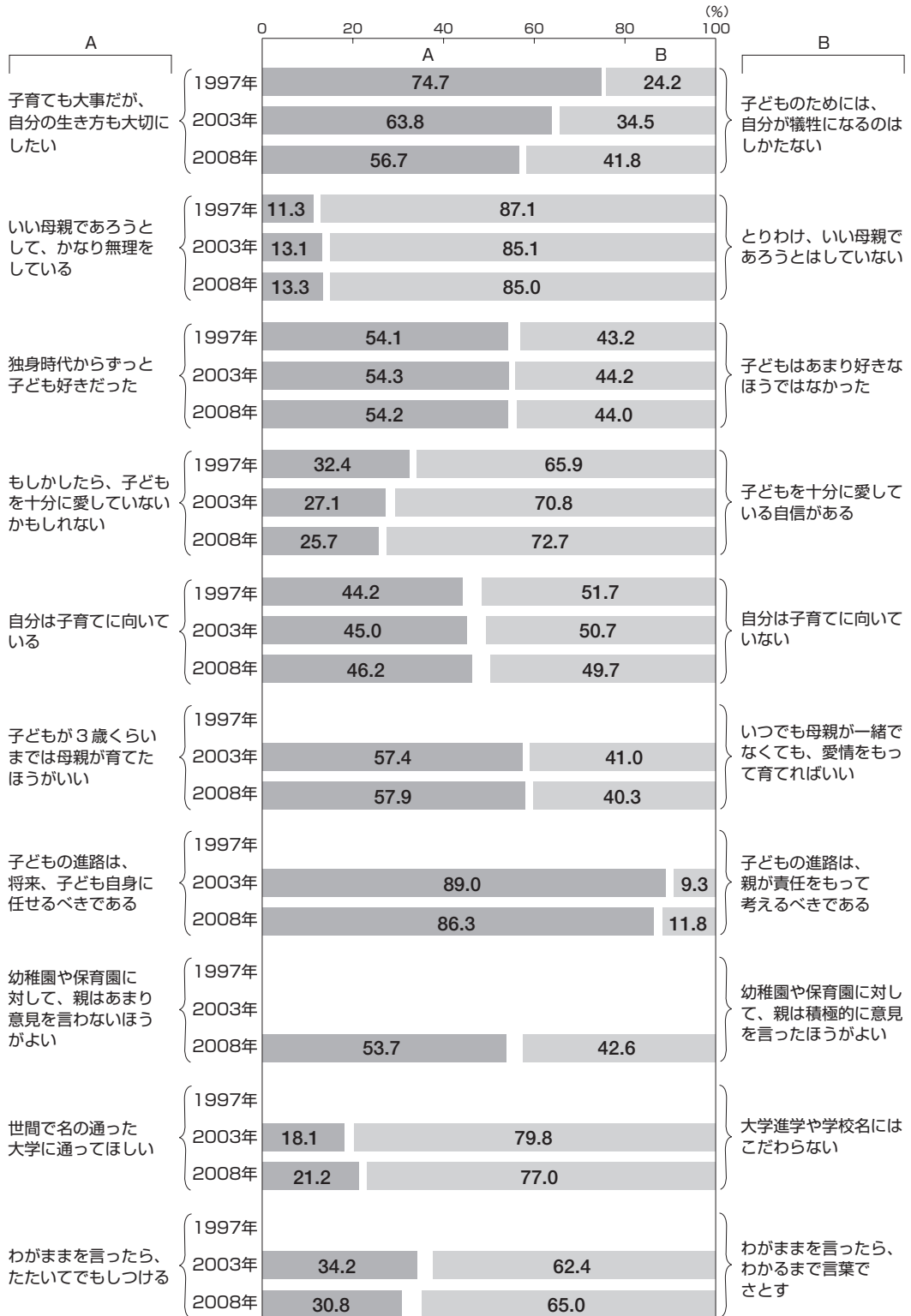
母親の年齢が母親自身の意識に何か影響を与えているのだろうか。ここで、08年調査の首都圏の結果を取りあげ、母親の年代別による意識の違いをみてみたい（図1-6-2）。

子育て意識に関する4項目のうち、「独身時代からずっと子ども好きだった」は、20代は6割だが、30代、40代は5割である。「子どもが3歳くらいまでは母親が育てたほうがいい」の回答割合をみると、20代は5割で、30代、40代は6割程度である。20代と30代、40代との間にほぼ10ポイントの差がみられる。「3歳児神話」を信じる母親は20代より30代、40代の母親のほうが多いようである。

子どもの教育や将来について、「世間で名の通った大学に通ってほしい」と考えている母親は、40代が3割弱、30代が2割であるのに対して、20代は1割未満にとどまる。「子どもの進路は、親が責任をもって考えるべきである」の回答比率は、20代の7.4%と30代の12.0%、40代の12.6%との間に約5ポイントの差がある。30代、40代の母親は高学歴志向が強く、子どもの進路への関与度が高い傾向がみられる。

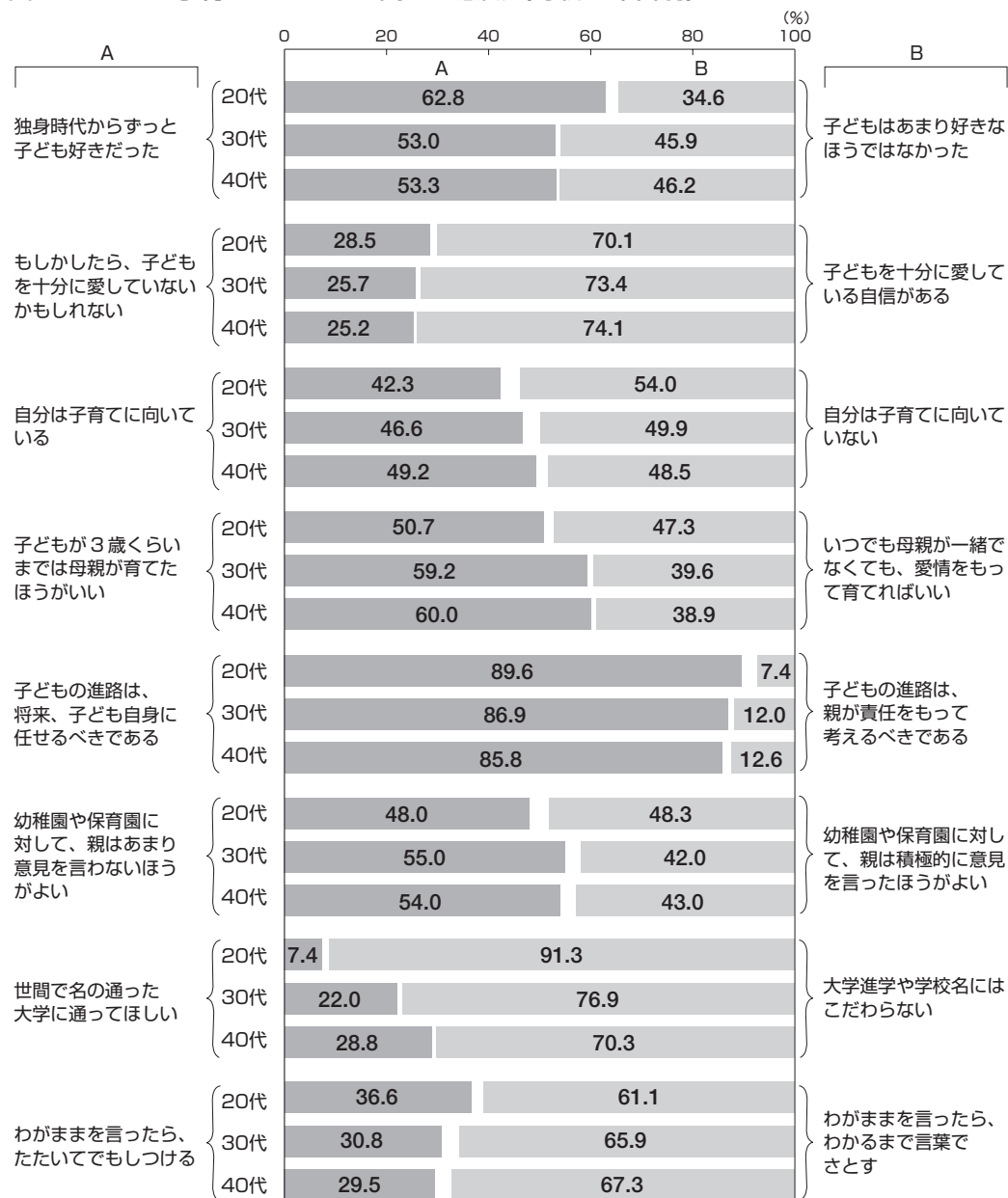
母親年代別の学歴をみると、大卒では20代が2割、30代、40代が約5割となっている。母親年代による学歴の違いが子育て意識に影響を与えていると推測する。

図 1-6-1 子育てやしつけに関する意識（経年比較）



注 1) 無答不明があるため、AとBの数値を合計しても100%にはならない。
 注 2) サンプル数は1997年2,478名、2003年3,477名、2008年3,069名。

図 1-6-2 子育てやしつけに関する意識（母親の年代別）



注 1) 無答不明があるため、AとBの数値を合計しても100%にはならない。

注 2) 10対の項目のうち、8対の項目を図示した。

注 3) 20歳から49歳までの母親のみを分析対象とした。母親の年代区分は、20代が20歳～29歳、30代が30歳～39歳、40代が40歳～49歳としている。

注 4) サンプル数は20代298名、30代2,074名、40代437名。

● 常勤の母親の子育て意識の変化が もっとも大きい

次に、母親の就業状況別にみた意識の違いをみてみよう。97年調査と08年調査の結果を図1-6-3に示す。

「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」と考えている母親は、97年調査に比べて、専業主婦が19.5ポイント、パートやフリーが13.8ポイント、常勤が20.1ポイント減少している。どの就業状況の母親も自分の生き方より子育てのほうが大切だと考えているようである。

とくに常勤の母親の減少幅がもっとも大きいことから、常勤の母親は自分の生き方と子育てとのバランスに対する考え方がかなり変化しているといってもよい。また97年調査時点では、パートやフリーと常勤との間に6.4ポイントの差があったが、08年調査では、その差がほとんどなくなっている。子育て意識ではパートやフリーと常勤との違いがあまりみられなくなったと考えられる。常勤の母親のこういった子育て意識の変化は、おそらく近年、派遣社員や契約社員といった非正規雇用の増加とも関係しているのではないかと推測する（派遣社員や契約社員といった非正規雇用を本調査の就業状況の分け方にあてはめると、常勤の区分になる可能性が高い）。

「いい母親であろうとして、かなり無理をしている」では、97年調査に比べて、専業主婦、パートやフリーは数値の変化がみられなかった。しかし、常勤の母親は5.1ポイント増加している。仕事と子育ての両立などで悩んでいる常勤の母親の様子がかがえる。

「子どもを十分に愛している自信がある」と回答している専業主婦は6.5ポイント、パートやフリーは7.0ポイント、常勤の母親は8.0ポイント増えている。

図1-6-3から、どの就業状況の母親の意識をみても、子育てに対する関心が高くな

ったことがわかる。また、常勤の母親の意識の変化がもっとも大きいといえる。

● 子育て意識が母親の学歴によって異なる

つづいて、子育てやしつけに関する意識を母親の学歴別に分析していきたい（図1-6-4）。

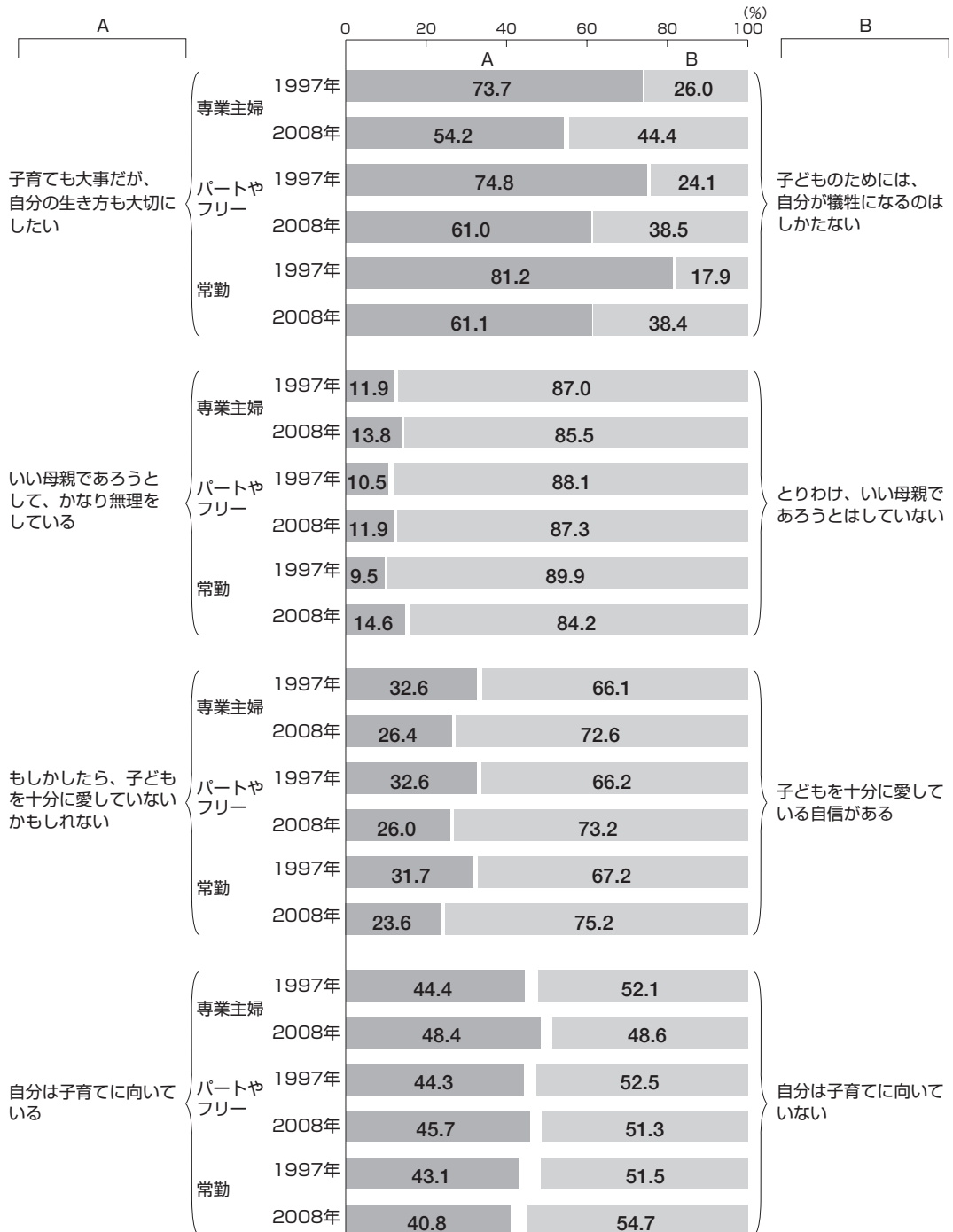
非大卒の母親と大卒の母親とで、もっとも意識の違いがみられたのは「世間で名の通った大学に通ってほしい」である。非大卒の母親が11.6%に対して、大卒の母親は34.3%で、両者の間に22.7ポイントの差がある。

また、自分の生き方や子育て意識について、大卒の母親の6割は「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」と考えているのに対して、非大卒の母親は5割である。それ以外に、大卒の母親のほうが回答比率が高い項目は「自分は子育てに向いている」（非大卒43.6%、大卒49.5%、以下同）、「幼稚園や保育園に対して、親はあまり意見を言わないほうがよい」（51.5%、56.7%）、「いい母親であろうとして、かなり無理をしている」（12.1%、15.1%）である。

非大卒のほうが回答比率の高い項目は「独身時代からずっと子ども好きだった」（非大卒56.8%、大卒50.5%、以下同）、「子どもの進路は、将来、子ども自身に任せるべきである」（88.8%、83.0%）、「わがままを言ったら、たたいてでもしつける」（33.4%、27.9%）である。

大卒の母親は高学歴志向が強く、子どもの将来の進路への関与度が高い傾向にある。一方、非大卒の母親は子育てのために、自分が犠牲になってもしかたない、また、独身時代から子どもが好きで、子育てへの関心が高いことがわかる。母親の学歴による意識の違いが明らかである。

図 1-6-3 子育てやしつけに関する意識（経年比較 母親の就業状況別）

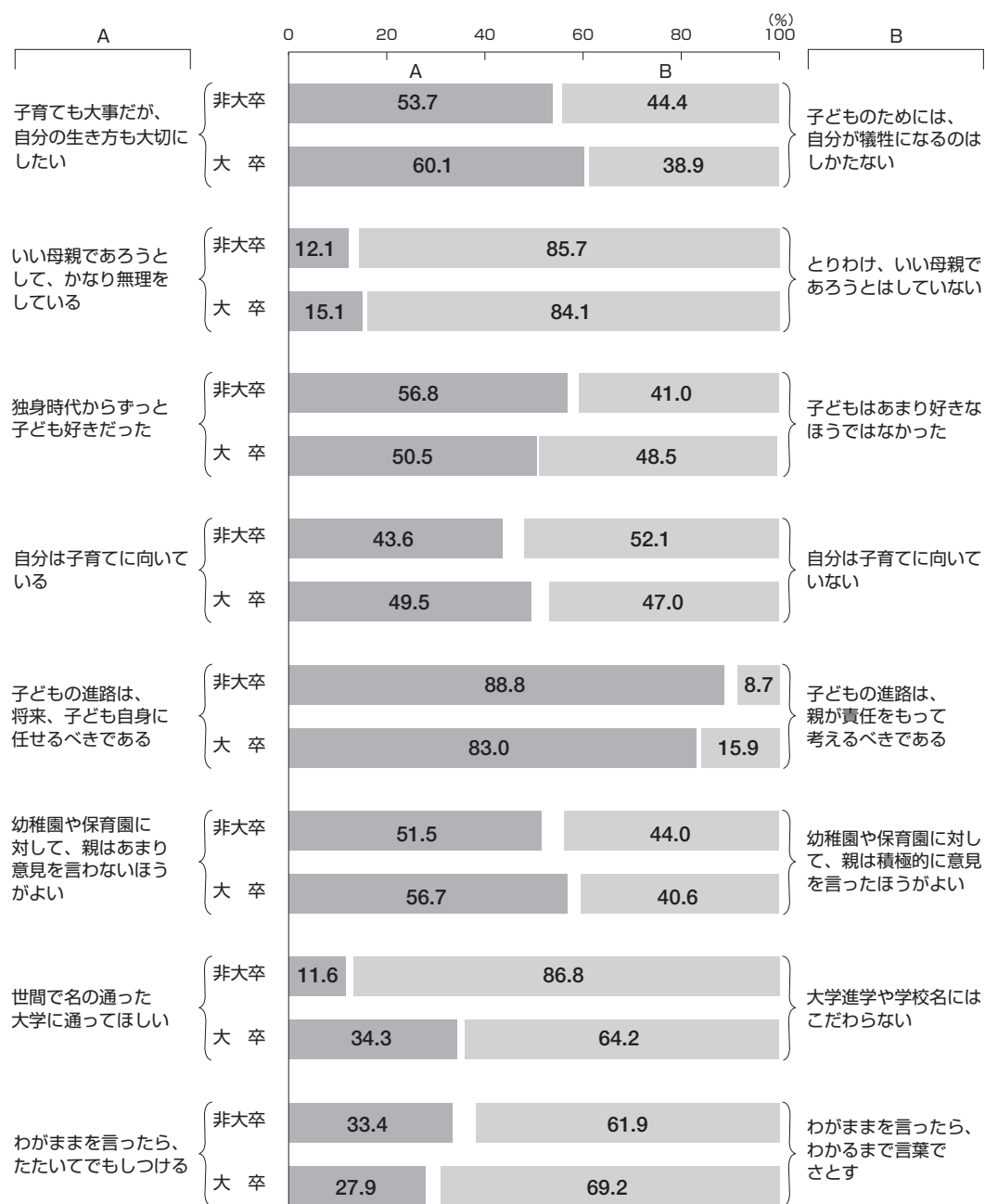


注 1) 無答不明があるため、AとBの数値を合計しても100%にはならない。

注 2) 10対の項目のうち、4対の項目を図示した。

注 3) サンプル数は専業主婦（1997年1,379名、2008年1,619名）、パートやフリー（1997年648名、2008年795名）、常勤（1997年357名、2008年419名）。

図1-6-4 子育てやしつけに関する意識（母親の学歴別）



注1) 無答不明があるため、AとBの数値を合計しても100%にはならない。

注2) 10対の項目のうち、8対の項目を図示した。

注3) 母親の学歴について、「あなたが最後に行かれた学校（中退も含む）を教えてください」の質問で「中学校まで」「高校まで」「専門学校・各種学校まで」と回答した人を「非大卒」、「短期大学まで」「四年制大学まで」「大学院まで」と回答した人を「大卒」とした。

注4) サンプル数は非大卒1,681名、大卒1,292名。

第2節

子育ての楽しさ

子育てを楽しんでいる母親は9割を超える。子どもとのかかわりが多い母親ほど子育てを「楽しい」と感じている。一方、育児不安が高い母親や、悩みや気がかりが多い母親は、子育てを「楽しくない」と感じている。

● 子育てを楽しんでいる母親は9割を超える

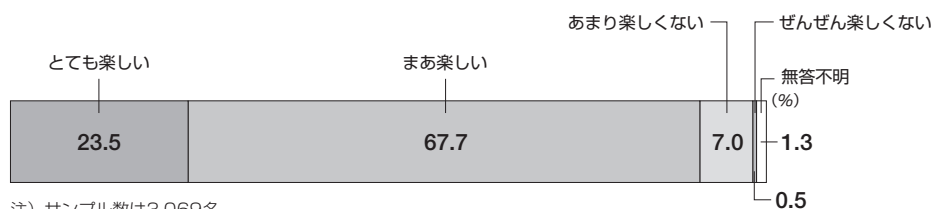
毎日の子育てが楽しいかどうかをたずねたところ、子育てを「楽しい」と感じる母親は、91.2%であった（「とても楽しい」＋「まあ楽しい」の%）（図1-6-5）。9割を超える多くの母親が子育てを楽しんでいるとされており、03年調査と比較すると3.5ポイント増加した。

● 子どもとのかかわりが多い母親ほど子育てを楽しんでいる

どのような母親が子育てを楽しんでいるのだろうか。ここでは子どもと一緒にす

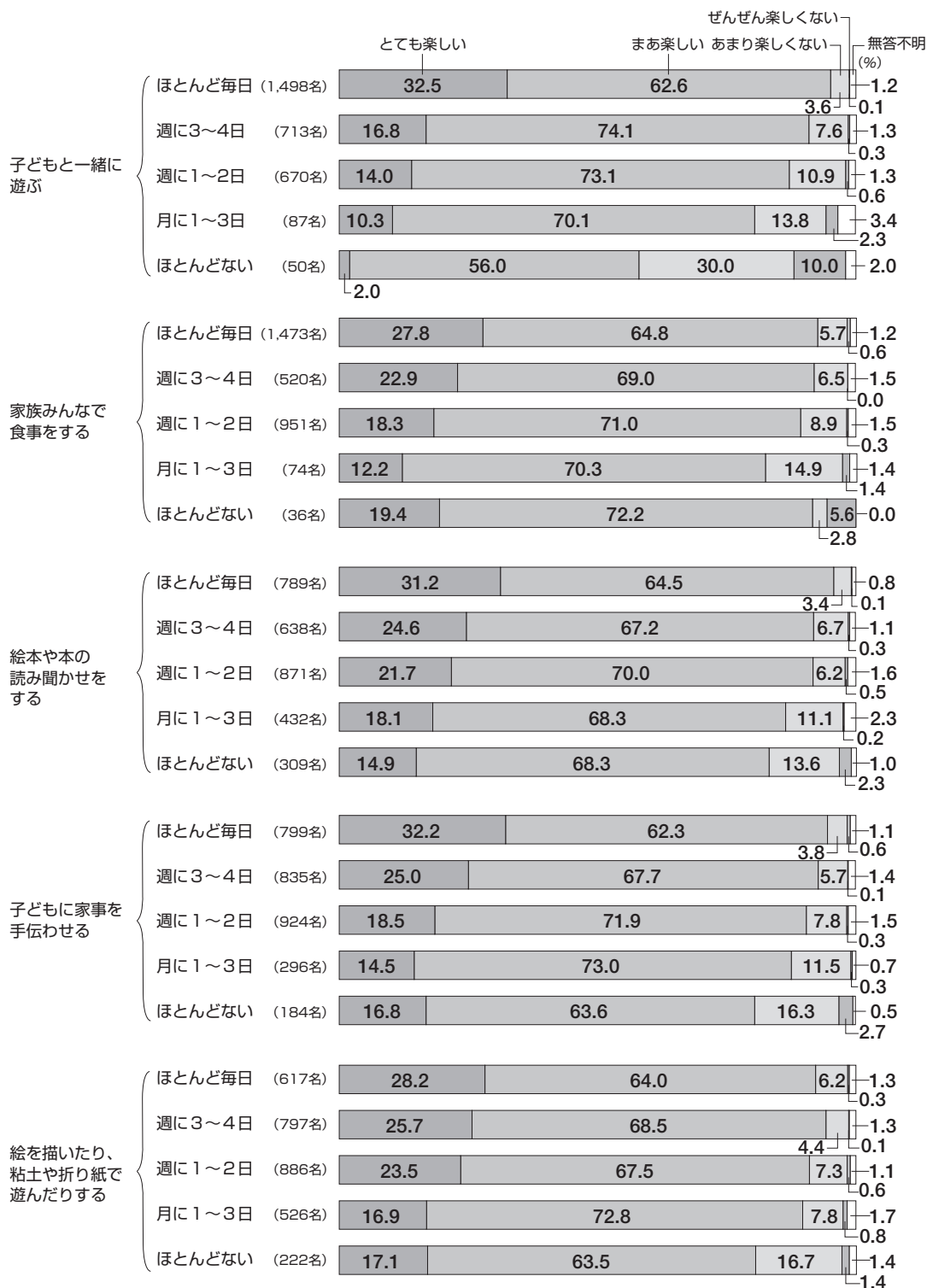
ることの頻度と子育ての楽しさの関係をみてみたい。図1-6-6は、子どもと一緒にすることの頻度別の子育ての楽しさを示したものである。この結果をみると、「子どもと一緒に遊ぶ」「家族みんなで食事をする」「絵本や本の読み聞かせをする」「子どもに家事を手伝わせる」「絵を描いたり、粘土や折り紙で遊んだりする」の5項目すべてにおいて、子どもと一緒にすることの頻度が多い母親ほど子育てを楽しんでいることがわかる。母親は、日常の子どもとの生活や何かと一緒にするなかで育児の楽しさを実感しているようである。

図1-6-5 子育ての楽しさ



注) サンプル数は3,069名。

図 1-6-6 子育ての楽しさ（子どもと一緒にすることの頻度別）



注 1) 12 項目のうち、5 項目を図示した。
 注 2) 「子どもと一緒にすること」での無答不明は省略した。

● 子育てを楽しめないと感じる 母親の特徴

子育てを楽しめないと感じている母親は、どのような意識をもっているのだろうか。図1-6-7は、育児不安に関する項目と子育ての楽しさの関係を示したものである。この結果から6項目のすべてにおいて、子育てに不安を感じていたり、子どもに否定的な行動や感情を示したりする母親ほど、子育てを楽しめないと感じていることが明らかになった。

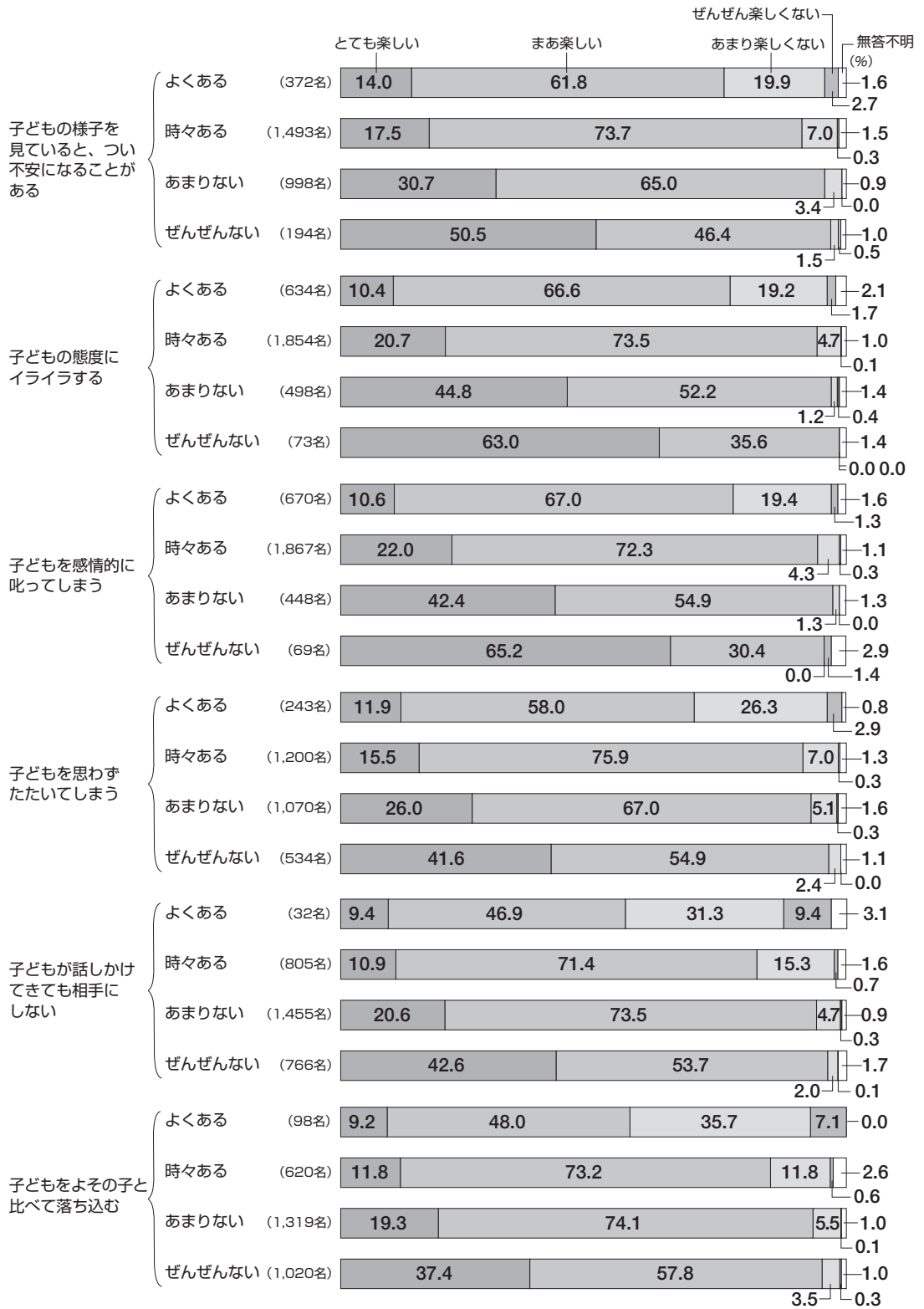
次に、子育ての楽しさ別の子育ての悩みや気がかりの平均選択数をみると、首都圏全体では、子育てが「あまり楽しくない」が13.5項目、「ぜんぜん楽しくない」が14.0項目である。子育てが「とても楽しい」(9.7項目)、「まあ楽しい」(11.3項目)と比較して多いことがわかる(表1-6-1)。悩みや気がかりの内容をみると、子育てを「楽しくない」と感じる母親は、「子どものからだと心の成長・発達、性格・態度・癖」「遊び・しつけ・教育」「あなた自身のこと」の悩みが多かった。子育て不安や悩み・気がかりが子どもへの否定的な感情や行動に結びつき、さらに不安を

高めてしまう可能性も考えられる。この負の連鎖を断ち切るためにも、個々の子育ての不安や悩みの内容に応じたサポートが必要であると思われる。

● 子育ての楽しさと負担感の関係

子育てをしながら働いていることの負担感をパートやフリー、常勤で働いている母親にたずねた。母親の就業状況別の負担感(「とても負担」+「少し負担」の%)をみると、パートやフリーの母親は60.6%、常勤の母親は82.3%が負担であると回答しており、常勤の母親のほうが負担感が大きいことがわかる(図表省略)。次に、子育ての楽しさと負担感の関係を示したのが表1-6-2である。この結果をみると、子育てを「楽しくない」(「あまり楽しくない」+「ぜんぜん楽しくない」の%)と感じる母親の79.3%が子育てをしながら働くことに負担感を感じており、子育てを楽しんでいる母親よりも負担感が大きいことがわかる。この傾向は、母親の就業状況で分けても同じであった。

図1-6-7 子育ての楽しさ（日ごろのかかわりの頻度別）



注1) 13項目のうち、育児不安に関する6項目を図示した。
 注2) 「日ごろのかかわり」での無答不明は省略した。

表 1-6-1 子育ての悩みや気がかりの平均選択数（子育ての楽しさ別）

		食事と食生活 (6項目)	日常生活 (5項目)	からだと心の 成長・発達、性 格・態度・癖 (8項目)	遊び・しつけ・ 教育 (17項目)	あなた自身 のこと (8項目)	すべて (44項目)
とても楽しい (720名)	平均値	2.0	1.5	1.7	3.3	1.1	9.7
	標準偏差	1.4	0.9	1.5	2.6	1.3	6.0
まあ楽しい (2,078名)	平均値	2.2	1.6	2.0	4.1	1.4	11.3
	標準偏差	1.4	1.0	1.5	2.8	1.3	6.2
あまり楽しくない (216名)	平均値	2.3	1.7	2.5	5.0	2.1	13.5
	標準偏差	1.5	1.1	1.6	3.0	1.6	6.9
ぜんぜん楽しくない (15名)	平均値	1.9	1.5	2.7	4.7	3.3	14.0
	標準偏差	1.4	0.8	1.7	3.4	2.8	7.9
首都圏全体 (3,069名)	平均値	2.1	1.6	2.0	4.0	1.4	11.1
	標準偏差	1.4	1.0	1.5	2.8	1.4	6.3

注1) 子育ての悩みや気がかりの45項目のうち、「その他」、無答不明は分析から除外した。

注2) 子育ての楽しさの無答不明は省略した。

表 1-6-2 母親の子育てをしながら働いていることの負担感（子育ての楽しさ別）

		とても 負担	少し 負担	あまり 負担ではない	ぜんぜん 負担ではない	無答不明
とても楽しい (285名)		15.8	47.4	27.4	7.0	2.5
まあ楽しい (818名)		15.8	52.9	24.8	4.2	2.3
楽しくない (92名)		30.4	48.9	14.1	3.3	3.3
全体 (1,214名)		17.1	51.0	24.5	4.9	2.5

注1) 「楽しくない」は「あまり楽しくない」+「ぜんぜん楽しくない」の%。

注2) 子育ての楽しさの無答不明は省略した。

「母親として」の満足度は「妻として」「働く（活動する）女性として」の満足度より高い。また母親の就業状況や家族構成が母親の生活満足度に影響を与えている。

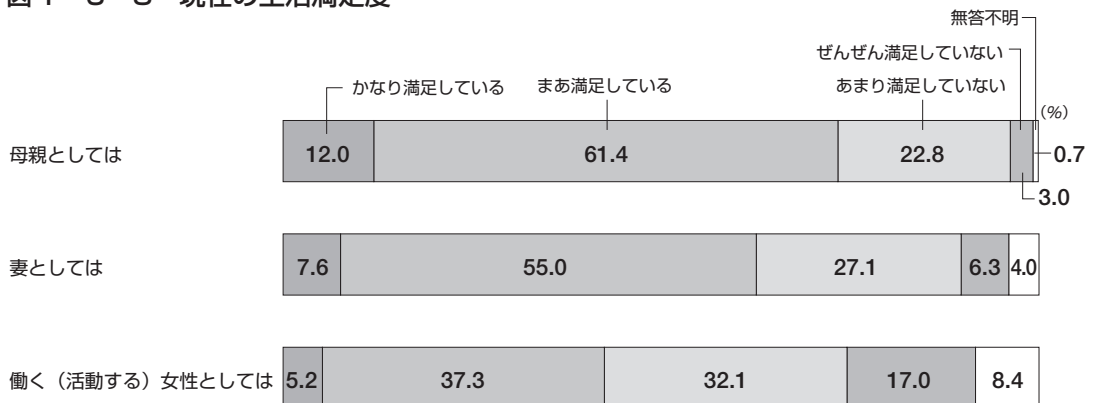
●現在の生活満足度

人間は「役割の束」である。「母親としては」「妻としては」「働く（活動する）女性としては」、そして、「ひとりの人間として（総合すると）」という4つの役割をここでは想定して、各役割ごとの生活満足度をたずねた。もちろん、きっぱりとそれらの役割を分割して満足度を回答してもらうのは難しいことではあるが、あえて回答してもらうことによって、実は役割によって満足度が大きく異なっていることがみえてくる。なお、本節では、「ひとりの人間として（総合すると）」は解釈が非常に難しいこともあり、今回の分析からは除外している。

図1-6-8は、「母親」「妻」「働く（活動する）女性」の3つの役割について、それぞれ

現在の生活満足度の回答状況を示したものである。「母親として」の満足度（「かなり満足している」+「まあ満足している」の%）が、他の役割に比べて高くなっており（73.4%）、次いで、「妻として」（62.6%）、「働く（活動する）女性として」（42.5%）となっている。「働く（活動する）女性として」の満足度の相対的な低さは気になるところである。子どもをあずけて働くことについて、少なくとも10年前、20年前よりは制度も環境も整ってきているように見えるが、現実には、十分に機能していないことのあらわれかもしれない。あるいは、働く（活動する）女性自身およびその家族の認識の問題（例：働くことで家族に迷惑をかけている）もあるのかもしれない。

図1-6-8 現在の生活満足度



注) サンプル数は3,069名。

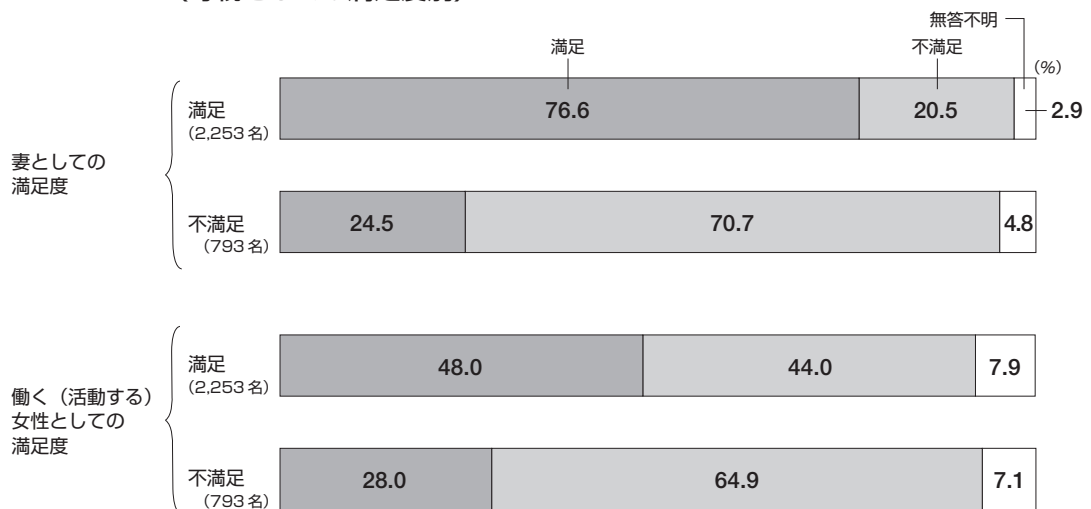
●「母親」役割と「妻」役割の関係、「母親」役割と「働く（活動する）女性」役割の関係

それでは、次に、役割への満足度を、「満足」＝「かなり満足している」＋「まあ満足している」、「不満足」＝「あまり満足していない」＋「ぜんぜん満足していない」として、母親と妻、母親と女性という2つの役割の満足度の回答をクロスしてみよう。母親として満足していると、妻としてはどうなのだろう。母親として満足していると、働く女性としては不満があるのだろうか。図1-6-9は「母親として」の満足度別に、「妻として」の満足度および「働く（活動する）女性として」の満足度を示したものである。図からは、「母親として」満足していると、「妻として」も満足度が高いことがわかる（76.6%）。しかし、2割強は、「妻として」不満だと回答している。他方、「母親として」の満足度と「働く（活動する）女性として」の満足・不満足

は拮抗している。「母親として」満足—「働く（活動する）女性として」満足が48.0%なのに対して、「母親として」満足—「働く（活動する）女性として」不満足が44.0%となっている。ただし、「母親として」満足している場合の「働く（活動する）女性として」満足だと回答する割合（48.0%）は、「母親として」不満足の場合の「働く（活動する）女性として」の満足度（28.0%）よりは相対的に高い。

「母親」と「妻」の場合も、「母親」と「働く（活動する）女性」の場合も、「母親として」の不満足と「妻として」と「働く（活動する）女性として」の不満足は密接に関連しているといえるだろう。あくまで、関連があるということなので、どちらが根源的かはわからない。もちろん、時間的に先行して担うことになるのは「働く（活動する）女性」「妻」「母親」の順番である。しかし、今回の報告書では、あくまで、「子育て生活基本調査」である

図1-6-9 妻としての満足度・働く（活動する）女性としての満足度（母親としての満足度別）



注)「満足」は「かなり満足している」＋「まあ満足している」の%、「不満足」は「あまり満足していない」＋「ぜんぜん満足していない」の%。

ので、まずは、「母親として」の役割を基本に位置づけて分析を行っている。さらに、図1-6-8で確認したように、もっとも満足度が高いのは「母親として」であったこともこのように位置づけたことの原因である。

また、「母親として」満足かつ「妻として」満足が76.6%に対して、「母親として」満足かつ「働く（活動する）女性として」満足は48.0%にすぎない。他方、「母親として」不満足かつ「妻として」不満足の場合、「母親として」不満足かつ「働く（活動する）女性として」不満足の場合は、それぞれ70.7%、64.9%となっており、ほぼ7割を示し、満足→満足の場合と異なる回答状況となっている。

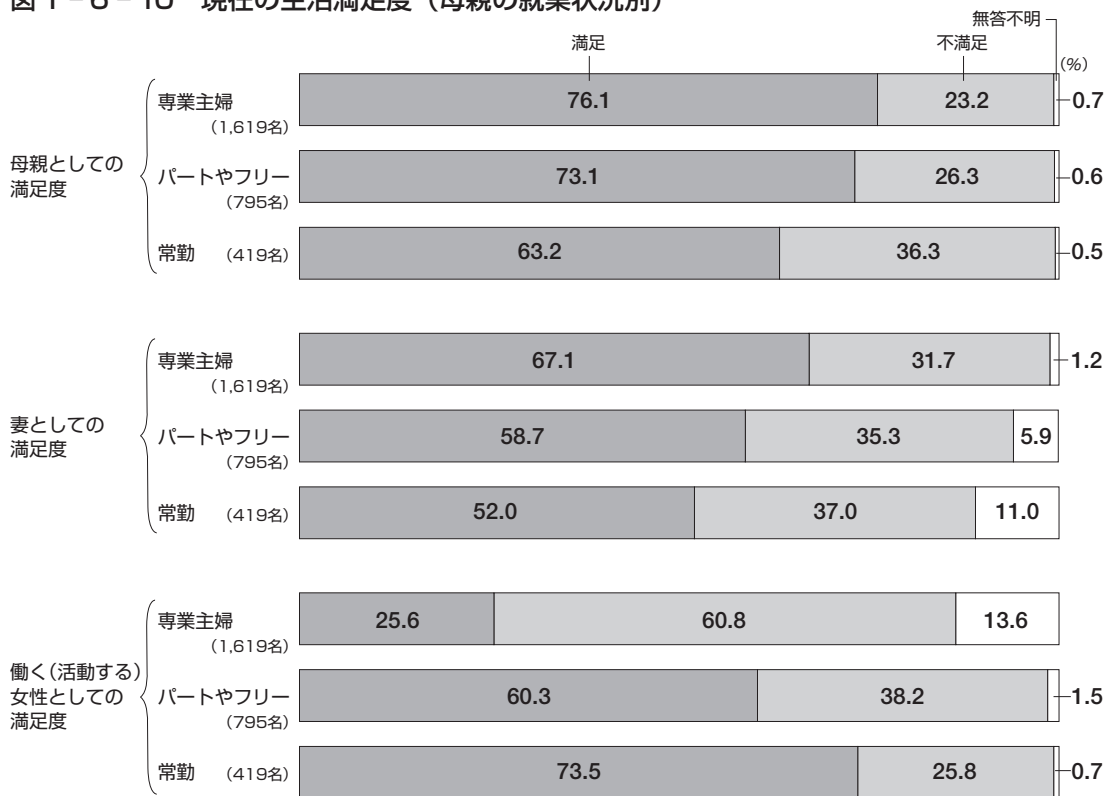
こうしてみると、働く（活動する）こと

への満足度を高めることと、家庭内での役割（母親、妻）の満足度を同時に高めること—両立—はいまだに難しいのかもしれない。また、1つの役割に不満があると、他の役割にも不満が生じる傾向が確認できる。すべての役割を満たすことは難しく、しんどい。しかし、1つの不満は他の不満へとつながっている可能性がある。

● 現在の生活満足度に影響を与える 母親の就業状況

図1-6-10は「母親として」「妻として」「働く（活動する）女性として」の満足度を、それぞれ就業状況別にみたものである。「母親として」「妻として」の満足度は、専業主婦>パートやフリー>常勤の順となってい

図1-6-10 現在の生活満足度（母親の就業状況別）



注) 「満足」は「かなり満足している」+「まあ満足している」の%、「不満足」は「あまり満足していない」+「ぜんぜん満足していない」の%。

る。また、常勤でも5割を超えており、決して低い数値ではない。専業主婦の満足度をみると、「母親として」>「妻として」>「働く(活動する)女性として」となっており、「母親として」に特化しているのかもしれない。

他方、「働く(活動する)女性として」は、専業主婦<パートやフリー<常勤の順となっており、かつ、上記の場合よりも就業状況による差が大きくなっているのが特徴的である。

それでは、最初に確認した「母親として」の満足度と「働く(活動する)女性」としての満足度を母親の就業状況別に確認してみよう(表1-6-3)。

「母親として」満足と「働く(活動する)女性として」満足は、全体としては4割台だった(図1-6-9)。そして、「母親として」満足—「働く(活動する)女性として」満足の場合と「母親として」満足—「働く(活動する)女性として」不満足はほぼ拮抗していた(48.0%—44.0%)。しかし、現在の就業状況別にみると、「母親として」満足—「働く(活動する)女性として」満足の割合は、専業主婦30.4%<パートやフリー68.0%<常勤81.9%となっている。しかも、それらの数値は、専業主婦を除くと6割を超えている。興味深いことに、「母親として」不満足—「働く(活動する)女性として」満足の割合も、同傾向を示している(10.7%<39.7%<59.9%)。逆に、「母親として」不満足—「働く(活動する)女性として」不満足は、専業

主婦>パートやフリー>常勤の順となっている。数値は決して高くはないが、母親として不満であっても、働くこと、活動することで満足を得る側面があるといえよう。

● 家族構成と現在の生活満足度

本節の最後に家族構成ごとにみた「母親として」「妻として」「働く(活動する)女性として」の現在の生活満足度をみてみたい。子育て中の女性にとって、支え手となる誰かがそばにいることは重要ではないだろうか。表1-6-4からは、①「母親として」および「妻として」の満足度は、「核家族」の場合も「三世同居家族」の場合も、満足>不満足となっている。②「母親として」および「妻として」の満足度は、「核家族」の場合も「三世同居家族」の場合も、ほぼ同じ数値を示している。③「働く(活動する)女性として」の場合についてのみ、「核家族」か「三世同居家族」かによる、満足度の差が他の役割の場合よりも相対的に大きく、「核家族」41.1%<「三世同居家族」48.8%となっており、家族構成と満足度は関連している。また、「働く(活動する)女性として」の満足度は「核家族」の場合、満足41.1%<不満足50.6%となっており、他の2つの役割の満足度の場合と異なる傾向を示している。やはり、働いている(活動している)場合、同居する家族がいることは重要なかもしれない。

表 1-6-3 働く（活動する）女性の満足度（母親の就業状況×母親としての満足度）

(%)

			働く（活動する）女性としての満足度		無答不明
	満足	不満足	満足	不満足	
母親としての満足度	専業主婦 (1,619名)	満足 (1,232名)	30.4	56.7	13.0
		不満足 (375名)	10.7	76.5	12.8
	パートやフリー (795名)	満足 (581名)	68.0	31.5	0.5
		不満足 (209名)	39.7	57.9	2.4
	常勤 (419名)	満足 (265名)	81.9	17.7	0.4
		不満足 (152名)	59.9	40.1	0.0

注) 「満足」は「かなり満足している」+「まあ満足している」の%、「不満足」は「あまり満足していない」+「ぜんぜん満足していない」の%。

表 1-6-4 現在の生活満足度（家族構成別）

(%)

	母親としての満足度			妻としての満足度			働く（活動する）女性としての満足度		
	満足	不満足	無答不明	満足	不満足	無答不明	満足	不満足	無答不明
核家族 (2,440名)	73.7	25.6	0.7	63.3	33.9	2.8	41.1	50.6	8.3
三世帯同居家族 (477名)	73.2	26.0	0.8	60.8	31.7	7.5	48.8	42.8	8.4

注) 「満足」は「かなり満足している」+「まあ満足している」の%、「不満足」は「あまり満足していない」+「ぜんぜん満足していない」の%。

配偶者と話し合うか、配偶者が理解してくれているか、配偶者が子育てに協力的かについては、6～7割の母親が肯定的に回答している。こうした配偶者のかかわり方の違いは、子育て全般の楽しさにも関連している。

この節では、母親の子育てに対して配偶者（子どもにとっての父親）がどのような影響を与えているかを検討する。配偶者との関係やかかわり方の違いによって、母親の子育てに対する意識や行動は変わるのだろうか。

● 配偶者との関係

最初に、配偶者に対する母親の認識を確認しよう。図1-6-11は、その結果である。

①配偶者との話し合いについては、「ふだんからご夫婦でお互いの関心事について話し合うことがありますか」とたずねた。もっとも多い回答は「まあ話し合う」（44.1%）であるが、「よく話し合う」とあわせて7割が肯定的な回答をしている。その一方で、23.2%が「話し合わない」（「あまり話し合わない」＋「ぜんぜん話し合わない」の%）と答えた。

次に、②母親の子育てに対する配偶者の理解であるが、調査では「配偶者は『現在のあなたご自身』を理解していると思いますか」とたずねた。図をみると、「理解している」（「よく理解している」＋「まあ理解している」の%）は63.4%であり、30.1%が「理解していない」（「あまり理解していない」＋「ぜんぜん理解していない」の%）と回答している。①の「配偶者との話し合い」よりも肯定率がわずかに低い。

つづけて、③配偶者の協力の程度については、「配偶者は子育てに協力的だと思いますか」と聞いた。結果は、「協力的」（「とても協力的」＋「まあ協力的」の%）が75.3%、「協力的でない」（「あまり協力的でない」＋

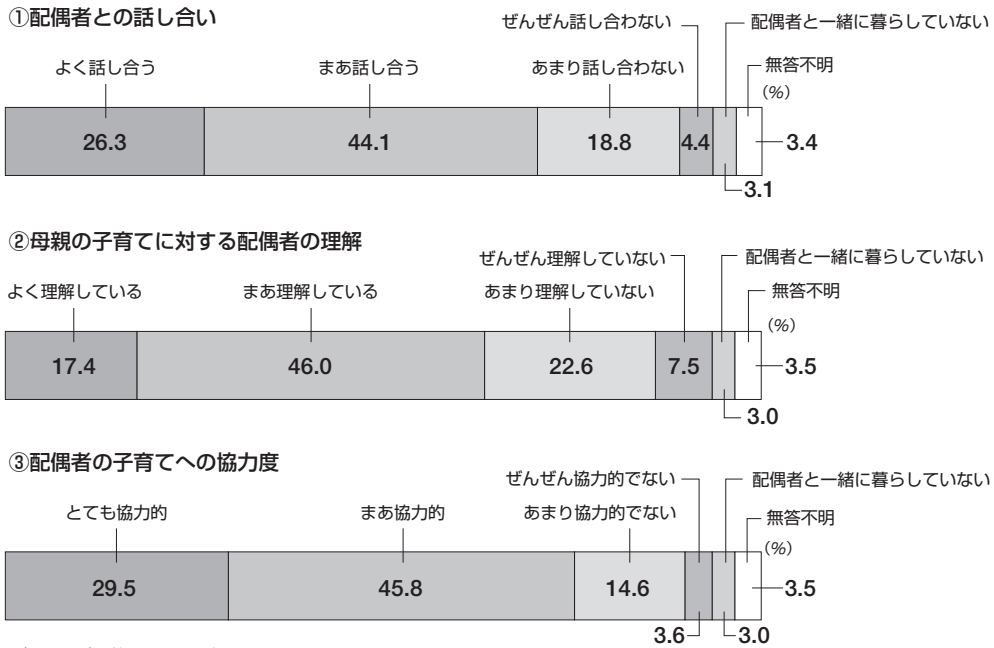
「ぜんぜん協力的でない」の%）が18.2%となった。配偶者は協力的だと認識している母親が多いようだ。

各項目について2～3割程度、否定的な回答があつて、配偶者から十分なサポートを得られていない母親がいることがわかる。しかし、配偶者と話し合い、理解と協力を得ながら子育てをしている母親のほうが多い。ちなみに、それぞれについて11年にわたる推移をみたが、大きく変化した項目はなかった（p.187巻末基礎集計表参照）。

● 子育ての楽しさへの影響

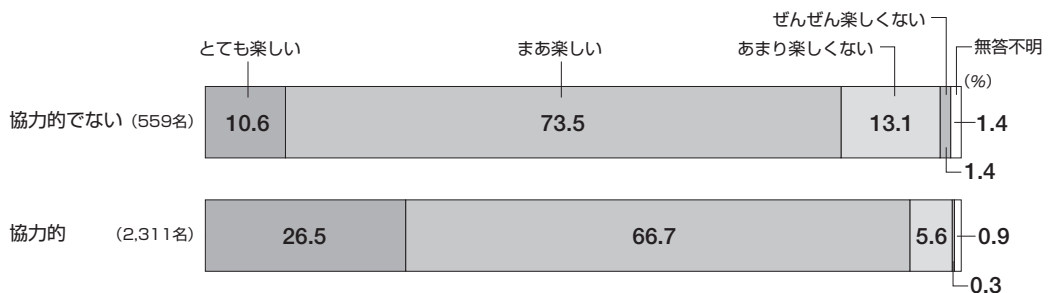
それでは、このような配偶者のかかわりは、子育ての楽しさにどのような影響を与えるのだろうか。図1-6-12は、配偶者が子育てに協力的かどうかで、子育ての楽しさに対する認識がどう違うかをみたものである。これをみると、配偶者が「協力的でない」場合は、子育てが「とても楽しい」と回答する母親が10.6%しかないが、「協力的」である場合は26.5%が「とても楽しい」と答えている。こうした違いは、配偶者との話し合いや子育てに対する配偶者の理解とのクロスでも同様にみられる。配偶者とのコミュニケーションが密であったり、配偶者が理解してくれていると実感したり、実際に協力してくれたりすることが、母親の子育ての楽しさと強くかかわっていることがわかる。この点から、配偶者である夫が妻をどう支えるかが、子育てにおいて重要な意味をもつと言える。

図1-6-11 配偶者との関係



注) サンプル数は3,069名。

図1-6-12 子育ての楽しさ（配偶者の子育てへの協力度別）



注) 「協力的でない」は「配偶者は子育てに協力的だと思いますか」の問いに「あまり協力的でない」「ぜんぜん協力的でない」と回答した母親、「協力的」は「とても協力的」「まあ協力的」と回答した母親。「配偶者と一緒に暮らしていない」と回答した母親と無答不明は省略した。

配偶者の帰宅時間は地域によって異なり、首都圏では遅い。また、母親の仕事の状況によっても違い、専業主婦の配偶者は帰宅時間が遅い傾向がある。帰宅時間が22時を過ぎると、配偶者が子育てに協力的だと認知する割合が下がる。

この節では、配偶者（子どもにとっての父親）の帰宅時間に注目する。配偶者の帰宅時間は、属性によってどのように異なるのだろうか。また、帰宅時間の違いが、子育てに対する協力にどのような影響を与えるのだろうか。

● 地域による違い

図1-6-13は、地域によって配偶者の帰宅時間がどのように異なるかをみたものである。これをみると、地方郡部では相対的に帰宅時間が早く、首都圏がもっとも遅いことがわかる。20時よりも遅い時間に帰宅している比率（「20時～21時」＋「21時～22時」＋「22時以降」の％）は、地方郡部35.3%＜地方市部44.9%＜首都圏65.8%となっている。

こうした違いが生じる原因として2つのことが考えられる。第1に、首都圏では「管理職」や「事務職」の比率が高いのに対して地方では「技能労働」が多いというように、地域によって配偶者の職種に偏りがあることだ。第2に、通勤時間の長さが帰宅時間に影響を与えていると推察される。首都圏で遅い時間帯の比率が高まるのは、通勤時間が長いことが一因になっていると考えられる。

● 母親の就業状況による違い

さらに、母親が仕事をしているかどうかによっても、配偶者（子どもにとっての父親）の帰宅時間は異なる。図1-6-14は、配偶者が20時以前に帰宅する割合を、母親の就業

状況別に示した。ここからは、常勤で働いている母親の配偶者は、相対的に帰宅時間が早いことがわかる。妻が働いている場合は、夫も早めに帰るようにしているのだろう。これに対して、専業主婦の配偶者は帰宅時間が遅めであり、20時以前に帰宅するのは3割に満たない。

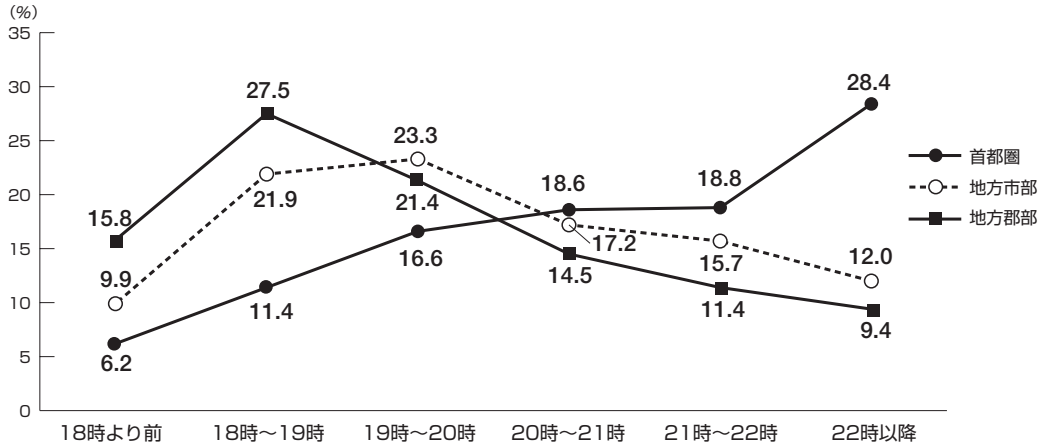
● 帰宅時間と子育てへの協力の関連

それでは、帰宅時間と子育てへの協力は、どのように関連しているのだろうか。図1-6-15は、配偶者は子育てに協力的だと思うかという質問に対して、「とても協力的」「まあ協力的」と回答した比率を示したものである。ここからは、主に次のようなことがわかる。

第1に、配偶者の帰宅時間と子育ての協力の程度は関連がある。帰宅時間が早いと、妻は夫が「協力的」であると認識する傾向があるようだ。子どもが起きている時間帯に帰宅できれば、実際に子どもの面倒を見る機会も生まれるためだろう。

しかし、第2に、「18時より前」から「21時～22時」までの時間帯は、緩やかに数値が減少するものの8割台をキープしていて大きな違いはない。これらに対して、「22時以降」だと一気に「協力的」という認識が低下して、7割台前半になる。仕事中心であまりに帰宅時間が遅いケースでとくに、配偶者が「協力的」だという思いがもちにくくなるようである。

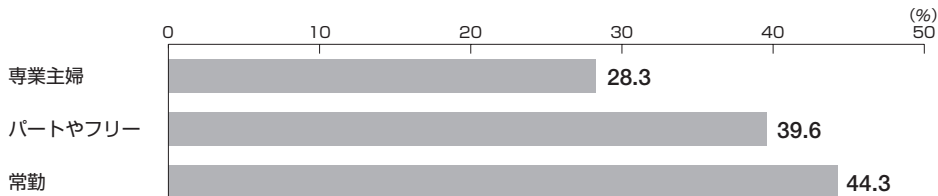
図 1-6-13 配偶者の帰宅時間（地域別）



注 1) 父親の帰宅時間について回答がなかったケースを除外して、比率を再計算した。サンプル数は、首都圏2,383名、地方市部1,334名、地方郡部765名。

注 2) 「18時より前」は、「17時より前」+「17時～18時」の%。

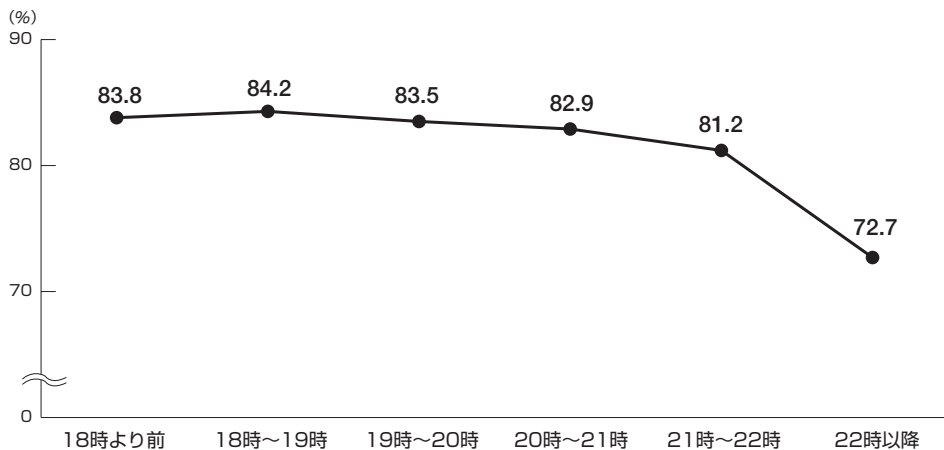
図 1-6-14 配偶者が20時以前に帰宅する割合（母親の就業状況別）



注 1) 数値は、「17時より前」+「17時～18時」+「18時～19時」+「19時～20時」の%。父親の帰宅時間について回答がなかったケースを除外して、比率を再計算した。

注 2) データは首都圏の母親のもの。サンプル数は、専業主婦1,348名、パートやフリー608名、常勤303名。

図 1-6-15 子育てに協力的な父親の割合（父親の帰宅時間別）



注 1) 「とても協力的」+「まあ協力的」の%。

注 2) データは首都圏の母親のもの。サンプル数は「18時より前」から順に148名、272名、395名、444名、447名、677名。

父母ともに子育てと仕事のバランスが大切

—— 子育ての楽しさや満足度の分析からわかること ——

● 子育ての楽しさや満足度の変化

この章では、母親の子育てに関する意識、楽しさや満足度などについて検討した。図1-6-1 (p.93) で明らかにしたように、97年調査と比べると「子どものためには、自分が犠牲になるのはしかたない」や「子どもを十分に愛している自信がある」を選択する者が増え、献身的な母親像が明らかになった。実際の行動は明らかではないが、少なくとも意識のうえでは「子育て」の比重が高まっているとみることができる。

それでは、幼児の母親が子育てに熱心になるなかで、楽しさの実感はどうに変化してきたのだろうか。子育ての楽しさについては、「とても楽しい」という回答が97年調査17.3%→03年調査20.1%→08年調査23.5%と推移している。「楽しくない」という回答はもともと少ないが、今回の調査では7.5%（「あまり楽しくない」＋「ぜんぜん楽しくない」の%）と、初めて1割を下回った（図表省略）。全体としては、よい方向に数値が変化している。図1-6-6 (p.99) で示したとおり、子どもにかかわる母親のほうが子育てを「楽しい」と考える傾向がある。子どもとのかかわりは5年間の経年比較しかできず、横ばいか微増の項目が多くて、大きな変化は示していない。しかし、子育てに熱心な保護者は増えており、子どもの言動に注意することで成長を感じるような場面が増えているのかもしれない。

次に、母親自身の生活満足度を検討したが、「満足している」という回答は、経年ではほぼ横ばいであった。「満足している」の比率（「かなり満足している」＋「まあ満足している」の%、97年調査→03年調査→08年調査の順）をみると、「母親としては」が72.3%→72.4%→73.4%、「妻としては」が62.8%→61.6%

→62.6%、「働く（活動する）女性としては」が35.7%→41.2%→42.5%と推移している。数値は顕著によくなっているとはいえないが、悪化もしておらず、母親としての満足度は7割台の高い水準を維持している（図表省略）。以上のような本章で取りあげたデータを概観してみると、母親の子育てをめぐる意識は、悪くなっているとはいえない。多くの母親は、充実した子育て生活を送っており、その姿は11年間では大きく変わっていない。

● 子育てが楽しく感じられない

母親の特徴

しかしながら一方で、子育てに関する意識、楽しさや満足度が、母親の属性によっても異なることが明らかになった。経年では大きな変化はみられなかったとしても、楽しさを十分に感じるができず、満足感を得られないなかで子育てをしている母親が存在することも事実だ。今回の分析では、そのような母親の特徴が明らかになった。

1つは、常勤の仕事をもつ母親の場合である。仕事の負担が重いほど、子育てが楽しく感じられない傾向も明らかである。仕事の疲れから子育てに前向きになれなかったり、帰宅が遅くなって子どもと接する時間が十分にもてないという状況が生じたりするのだろう。表1-6-2 (p.102) の数値などは、母親たちが過酷な労働環境のなかで仕事に従事することがないよう、ワークライフバランスの施策を充実させる必要性を感じさせる。

もう1つは、夫（子どもにとっての父親）が子育てに協力的でないケースである。夫が子育てに協力的で、夫婦間での話し合いも多く、夫によく理解されていると感じる場合は、子育てが楽しいと感じる割合が高まる。これに対して、夫が協力的でない、「配偶者と

一緒に暮らしていない」ケースよりも、「楽しい」の数值が低くなる。子どもの父親が子育てに協力的になれるかどうかは、帰宅時間の早さなどの労働状況とも関連している。母親と同様に父親についても、子どもとかわる時間を確保し、母親の子育てをサポートで

きるように、ワークライフバランスを見直す必要があるといえるだろう。

楽しい子育て、満足度の高い子育てをするためには、父親も母親も働きすぎないことが肝要なようだ。行政や企業には、そのような子育てを実現するための施策が求められる。